おすすめの本

熊谷　朱実（高校　教頭・数学科）

遠い記憶を呼び起こして、高校生の頃、夢中で読んだ本を思い出してみました。『一年一組せんせいあのねー詩とカメラの学級ドキュメント』鹿島和夫編　です。神戸市の小学校1年生の詩を集めた本です。詩を集めるといっても「せんせいあのね」の書き出しで、子供たち（生徒）が日々の思い出をつづり担任の先生が返事を書く、対話ノート「あのねちょう」に書かれていたものを編集したものです。「あのね教育」の実践は、ドキュメンタリー番組「一年一組」（昭和54年度　第34回　芸術祭優秀賞受賞）や本などで紹介され、大きな反響を呼びました。その詩の一部を紹介します。

おとうさん
　おとうさんのかえりがおそかったので
　おかあさんはおこって
　いえじゅうのかぎを
　ぜんぶしめてしまいました
　それやのに
　あさになったら
　おとうさんはねていました

やすいけしょうひん
　おかあさんが
　「きょうやすいけしょうひんこうてきてん」
　ゆうたらおとうさんが
　「なんぼええけしょうひんつこうても
　むだやゆうことがやっとわかってんな」
　とわらいながらゆうた
　やすいけしょうひんは
　おとうさんのへやーとにっくやった

かい
　耳にかいをあてるとうみの音がきこえた
　かいにはうみがはいっとんかな
　うみにずっとすんどったから
　うみの音がしみこんでいる
　うみはかいにいのちをあげたんかな

（『一年一組せんせいあのね』鹿島和夫編・理論社）

ここでは紹介しませんが、とても長い衝撃的な詩もあります。子どもたちの感受性に驚かされます。

鹿島和夫先生の本を、何冊も読みました。小学校の高学年頃からの「先生っていいな」という思いがより強くなったことを覚えています。昨年2月、鹿島和夫先生は87歳でお亡くなりになりました。

もう1冊、紹介させていただきます。小泉吉宏さんのシッタカブッタシリーズ『愛のシッタカブッタ』です。「心」を語る『ブッタとシッタカブッタ』シリーズの1冊です。一匹のブタ君が主人公のマンガです。多くの悩めるブタを通して、心のしくみやものの見方がわかってきます。読むと心がふっと軽くなります。シリーズの中で、前述した『愛のシッタカブッタ』は、高校生の皆さんに特にお薦めです。これも一つだけ紹介します。

悩むことは悪いことじゃない
カッコわるいことは悪いことじゃない
悲しいことは悪いことじゃない
気が小さいことは悪いことじゃない
そのままでいいんだ
ぜんぶ愛すべき
自分の人生なんだもん

（『愛のシッタカブッタ』小泉吉宏著・メディアファクトリー）

本好きのつぶやき

荒川　智之（高校　情報・地歴公民科）

子どもの頃からの本好きは、親の影響が大きかったように思います。百科事典や図鑑に夢中になり、お気に入りのページが擦り切れるまで何度も読み返していました。運動部に所属していた中学・高校時代も、埋まっていく本棚を眺めるのが好きでした。

学生の頃は、とにかくSFを読み漁っていました。ハヤカワ文庫の売上に貢献したと思います。受験期になり、国語の文学史に出てくるような「名作」に関心が向かなかったことをちょっとだけ残念に思ったことを覚えています。

子どもも本好きに育ってくれまして、図書館やプラネタリウムを家族で巡りました。馴染みの図書館に入ると放牧です。お気に入りの席があるようで、ちょこんと座ってページを捲っていました。休憩時間にジュースを飲みながら、読んでいる本や、次に読もうとしている本の話を気が済むまで話していました。ジュースと話に満足すると、また本の世界へ。気になる本を見つけると、まるで秘密基地を見つけたように、静かに読書の世界へと没頭していきます。そして、帰る時間まで再び放牧です。

私が子どもの頃に読んだ本と同じものを読んでいたこともあり、親子で同じ本を共有できる喜びを感じました。

いつしか家の本棚にある本に興味を向けるようになり、今では私が買ってきた本を先に読んだりしています。ある時、私と同じ本を同時期に買っていたことが分かり、不思議な偶然に大笑いしました。本棚は子どもの本で埋まっていくようになり、子どものオススメの本を読むこともあります。

本屋さんも大好きな空間です。仕事帰りに立ち寄り本に触れていると、交感神経優位となったココロとカラダが落ち着いていきます。お酒は体質に合わず飲めないのですが、活字で酔えるようです。「酒代が本代になっているのだから、カラダにもアタマにも良いのである」という謎理論で月々の出費の正当性を主張しています。そしてついつい、本のジャケ買いをしてしまうのでした。最近は、思わずジャケ買いをしたくなるような本屋さんが少なくなってきていて、寂しさを感じています。

図書館は、単なる本の保管場所ではありません。知とコミュニケーションのハブとなる場であると思います。知が集まり、人が集まり、知と人との掛け算が行われ、対話が生まれ、新たな文化が創出されていきます。それが新たな人を引き付け、新たな知が加わり、さらに別の文化が生まれていきます。静かに本を楽しむ場であることも大切ですが、文化を生み出す場であることも忘れてはいけません。

図書館というネーミングから、どうしても活字の集合体である本が連想されがちです。しかし、表現の手段としては、活字に限定される訳ではありません。マンガ、アニメ、映画、絵画、音楽、動画コンテンツなど、様々な表現方法があります。すべては情報伝達を媒介する表現手段であり、同列に扱うべきものではないと思います。

本好きな人は、読書の素晴らしさを熱心に語ります。否定はしません。ただ、認知特性によって得手不得手があるのも事実です。本好きな人は視覚の認知特性が優位であるが故に読書との相性が良さそうです。一方で、聴覚が優位のタイプの人もいます。思考の幅を広げることで、より多くの素晴らしい作品と出会える可能性が広がるのではないでしょうか。

表現手段はテクノロジーの発達とともに広がってきました。受けとめ方の多様性に異を唱えるのは、ステキな作品と出会う機会を逃すことにもなりかねません。国境の長いトンネルを抜ける物語も、勇者の死から20年後の物語も、どちらも美しい。心からそう思います。

近年、図書館は様々な媒体を扱うようになってきています。メディアセンターと呼ばれる施設も増えてきています。プラトンを読みながら、ソクラテスのように対話をしたり、映像作品を鑑賞しながら、新たな作品を制作したり、ひとり深く思考をしたり、仲間たちと本質観取をしたり……。知や人との出会いの場となり、新しい文化を発信していく。そんな図書館・メディアセンターが増えていくことを楽しく想像しています。

図書館フェア 2024

7月3日～11日に図書館フェアを開催しました。
七夕の笹飾りで華やかになった図書館で、様々な展示や企画を行いました。

〈テーマ展示①〉「日本初の月面着陸 SLIM プロジェクト」

１月に日本初の月面着陸に成功したSLIMについて展示しました。SLIMは他の国ができなかった「月の狙った場所にピンポイント着陸」ができる小型探査機です。その技術のすごさや、性能などを紹介しました。ショーケースの壁に黒い布を貼り、宇宙をイメージしました。宇宙に興味のある生徒・学生も多く、じっくり展示を見ていました。

〈テーマ展示②〉「WE LOVE コアラ 来日40年」

コアラが初めて日本に来たのは40年前のことです。3か所の動物園が受け入れをしましたが、そのひとつが名古屋の東山動植物園でした。そんな名古屋にゆかりのあるコアラをテーマにしました。コアラの魅力や、不思議な生態などを解説しました。また、コアラは絶滅の危機に瀕しています。そういう状況も知ってほしいと思い展示を行いました。

〈テーマ展示③〉「新紙幣発行～お札の新しい顔～」

図書館フェアの初日は、ちょうど新紙幣が発行される日でした。20年ぶりの新紙幣発行に日本中が大盛りあがり！それにちなんで、新紙幣について展示しました。新しい顔となった3人の伝記や関連する本を置きました。他にも旧紙幣からの変更点や紙幣の歴史など紹介しました。お金に関するQ＆Aのパネルも作り、楽しく学んでもらいました。

その他の様子

本を借りた人に、図書館手作りの「コアラしおり」をプレゼントしました。

短冊を書くスペースは、たくさんの高校生で賑わっていました。

発　行：名古屋市瑞穂区春敲町2-13　瀬木学園図書館　2024年12月　NO.43　印刷：富士フイルムサービスリンク㈱